

第1回 10月4日(火)

「スイス・アルプスの少数言語、ロマンシュ語」

講師：富盛 伸夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

多言語国家スイスには四つの公用語があります。ドイツ語・フランス語・イタリア語につづいて、四番目の言葉がロマンシュ語です。小さいスイスの中でも1%に満たない3万5千人ほどの話者しかいない言葉ですが、スイスの公用語となっているのには長い苦難の歴史がありました。スイスはヨーロッパの中央にあって、まさに縮図といえるほどの多言語多文化社会となっています。古来の民話や伝承文化を保存する少数者の言葉を尊重することが、社会全体の調和と共生を支えているといえるでしょう。

ロマンシュ語はラテン語から独自に進化したロマンス系の言語のひとつです。ヨーロッパの屋根、スイス・アルプスの過酷な自然と質素な生活文化から生まれた言語世界は、他のロマンス諸語から一線を画して、レト・ロマンス語系グループという言語群を形成しています。音声面でも、語彙面でも独特の特徴をもっており、この地を旅したフランスの文学者マルセル・ブルーストは「ゲルマン語の強く激しい音とイタリアの伸びやかな音の響きが織りなす」言葉であると形容しています。文法面でも、ゲルマン諸語と共通する要素とラテン語を受け継ぐロマンス諸語的な要素とが拮抗し、調和している不思議な構造を作り上げてきました。

本シリーズの第一回目として、少数者の言葉が現代を生きのびるむずかしさと意義にふれつつ、言語学的に見ても興味深い、このロマンシュ語の言語的特質をまとめたいと思います。